

ものづくりを通してみえる 新たな視点(ものづくり講座)

岐阜県立森林文化アカデミー
松井 勅尚

「自然は人間の思い通りにならない」

東日本大震災は、今後の日本のあり方に大きく影響する出来事でした。それは一人一人の生活の仕方にも当然影響します。つまり、「今まで通り…」とか「慣例に従って…」では駄目で、立ち止まって考える必要があるのです。

日本人が今後どのようなライフスタイルを選ぶのか?モノを選ぶのか?その選択するための「視点」を今一度問い直す時期ではないでしょうか?

ものづくり講座では、手工具・機械の使い方を基礎から教え、2年間で小物や家具の制作ができるまでに指導しますが、ここではこれらの問題を解決すべく、アカデミーでしか学ぶことができない、3つの視点「木育」「広葉樹の森づくり」「グリーンウッドワーク」についてお話しします。

●木育のプログラムや教材開発

川下で活動していると思うことがあります。

日本人が、あまりにも木に関する基本情報を持っていないことです。「木の恵みのある地域ですが、まず自分が木のことを知らないと感じました。先ずは自分が学び、身近な自然を大切にできるようになりたいです。」講座後のほとんどの方の感想です。林業への理解の難しさは、人口の大部分は川下(都市部)であるということです。木育(森林のたよりAUG2010)の必要性はそこにあります。今後大切なことは、使い手への「川上の視点」へ働きかける教育です。

ものづくり講座では、木育のうち、木からのアプローチを実践してきました。新課程になり、さらに樹からのアプローチである「森のようちえん」(森林のたよりJUN2010)も加わり木育の両輪を学ぶ環境が整いました。写真は水に強い様々な木でつくる教材「水の積み木」です。遊びながら木の扱いも学ぶプログラムを開発し、保育園で実施し大好評でした。

木の教材開発には確かなつくる技術が必要となります。ものづくり講座は、木の暮らしを考える木育の場の提供と人材育成をしていきます。



▲水の積み木

●広葉樹の森づくりにつなげるものづくり

岐阜県はかつて家具に使われる広葉樹を多く産出してきました。今ではその量は減りましたが、日本有数の丸太市場や、高級材を扱う銘木商が、いまま岐阜県内にいくつも残っています。広葉樹の森を実際に手入れして育てながら、間伐した木を自ら製材、乾燥させ、小

物や家具づくりに生かす実習も行っています。

写真は、ある椅子とその材料となった切り株の前での講義です。生きた樹が、材料となり、作品となる、その一連の過程をすべて体験でき、新たなつくる視点を獲得できるのです(森林のたよりNOV2010)。

川上においても林業と言えばスギ・ヒノキ等針葉樹が中心ではありますが、この広葉樹の言い分に耳を傾ける視点が、岐阜県の健全な森林づくりにとって大切であると考えます。



▲もりづくり

●生木を人力で削るグリーンウッドワーク

原発の問題は、今後のエネルギーのあり方を問い直す場となりました。私たちは如何に多くのことを電力に頼っているかを改めて考えさせられ、電力を使いたい放題使える時代は終わることを誰もが予感しました。グリーンウッドワーク(森林のたよりOCT2009)とは、電気に頼らず人力の道具を用い、生木を割ったり削ったりして加工し、小物や家具をつくる木工のことです。子どもやお年寄りも安全に楽しみ、環境にやさしい木工として注目されています。写真は生木を割り、斧で削っているところです。板からスタートする従来の木工では難しかった、多くの視点の獲得の可能性を秘めています。これは使い手にとっても、つくり手にとっても重要なことです。

日本人がどんな暮らしを求めるのか?つくり手が育んだ技術をどう使うのか?すべては「心」が決められており、新たな視点の獲得が重要性を増しているのです。日本人は、あまりにも「つくること」を他人に預けてしまいました。ものづくり講座は先ずはそこからスタートし、日本人の暮らしのあり方を提案できる人材を輩出していきます。

さて6月26日(日)にオープンキャンパスが開催されます。興味のある方、是非お越し下さい。この笑顔の学生(学校案内?)が待っています。

●詳しい内容が知りたい方は

TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー まで



▲富張さん